

曲 目 解 説

『ジークフリートの牧歌』は、ワーグナーの生涯で最も合わせな時代を象徴すると言える。また多くの歴史的人物が彼を中心に結び付いていた時でもある。ルードヴィヒ2世に見い出され経済的にも恵まれ、若い妻コージマとは数々の障害を克服し、ワーグナーの得意の時代であった。クリスマスイブ、コージマの誕生日に、「彼は妻に何の贈り物もしなかった。」と妻の日記に読める。これも演出家ワーグナーの才能の1つかも知れないが。25日の早朝、町から呼ばれた楽員は階段から寢室に整列し、今だ微睡むコージマの為にこの曲を演奏したのだ。曲は3部分に分けることが出来、初めにフルートによる「微睡み」のテーマ、中間部ではホルンによる「子守歌」がある。終結は様々なメロディーが交錯し合いまさにワーグナー的な小品となっている。これらの動機は全て楽劇『ジークフリート』から転用されていて、全体を支配している「平和の旋律」も例外ではない。ワーグナーは、自身を勇士ジークフリートに、コージマをワルキューレに投影していたのだろうか。

これに遅れること2年、1872年にピゼーは、『アルルの女』を作曲している。ヴオードフィル劇場支配人の旧友カルヴァロからピゼーは、ドテの戯曲の為に作曲を依頼された。がしかし、26人の演奏者という制限付きで、結局は前奏曲、メロドラマ等27曲の付随音楽が書かれた。劇の初演は不成功であったが、その後彼はこの中から4曲を選んで手を入れ、3管編成にした。同年11月、ハドルーの指揮で組曲『アルルの女』として発表した際には、大成功を納めた。これが今日の第1組曲である。この大成功に意を得てピゼーは、オペラ『カルメン』に着手するのである。彼の音楽は、形式的には古い型を踏襲しているが、新味のするハーモニーや楽器の用い方に新機軸が見られる。当時にあつては、ポピュラー音楽として一般に受け入れられていた様である。



モーツァルトは、1788年夏『ジュピター』を作曲した。前年父をも亡くし彼はこの年経済的にはもちろん精神的にも窮地にあつた。一般的には悪妻として知られるコンスタンツェは、やはり療養の為にバーデンにあつた。モーツァルトの収入は、当時にあつては上流中産層に匹敵する額ではあるが、妻の治療費や自らの浪費癖からこの頃には方々に借財を作っている。前年グルックの後継者として宮廷作曲家に任ぜられたもののあくまでも形式的であり、ウィーン市民の関心はモーツァルトからすでに離れていた。この事についてハイドンは、「この不出世のモーツァルトが、いまだどこの国王、どこの皇帝の宮廷にも迎えられないという事実に腹が立つ。」と嘆いている。

曲は4楽章から成り何れも古典美の諸傾向を有しているが、和声的、対位的には次代ベートーヴェンを想わせるものがある。ロマン主義時代を通じて文字通り交響曲の最高神であった。特に第4楽章のフーガは、技法、芸術性共に高く評価されている。モーツァルト研究家アインシュタインは、『ジュピター』をして交響曲の完成期としている。

『ジュピター』は、モーツァルトの心からの叫びであつたらう。世に入れられない彼は、依頼主もないこの交響曲を自らの為に、芸術の為に作曲したのだらう。この様な態度は、後に精神文化の責任を自負するロマン派の作曲家に受け継ぐことになる。が彼自身は、何処にその精神的支柱を求めていたのだろうか。天才モーツァルトには不必要だつたのだろうか。彼の生命力は妻コンスタンツェへの愛であつたらう。現存する彼の書簡を紐解けば容易に理解できる。時折の戒めの言葉も彼女の病態を危惧してのことであつた。そして第4楽章のC、D、F、E、の旋律線の何と健康的なことか。『ジュピター』は、モーツァルトの妻コンスタンツェへのこよなく深い愛で染めぬかれている。

(藤井部 勉)